

患者が変われば 医療が変わる 医療が変われば 地域が変わる



島根益田がんケアサロン 代表
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの㈱フジキン総務部部长兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンで益田市移住。益田ドライビングスクール合宿型システム作りを依頼される(ガイアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

第21回 高齢者住宅フェアin大阪に参加して感じたこと

昨年11月、「高齢者住宅フェア」が開催されたインテック大阪へ初めて訪れた。昨年入院して講演に穴をあけてしまった会場。悪い印象がよみがえった。私自身講師としてステージに上らせて頂いたが、集客は今一つ。がん患者の声を聞きたくないのだろうか。

ユーザーの声をもっと聞いて

患者の視点は理解済みなのだろうか。テーマに問題があったのだろうか。

出展している企業については建築、設備・建材、診療所・薬局、介護予防機器、食事サービスなど多業種にわたっており楽しませていただいた。

しかし出展している企業の対応で気になったことがあった。患者や利用者の声が反映されていない。どの施設も入居者はお年寄りや患者なのだ。最終的にはお年寄りや患者がいることをどこまで認識しているのだろうか。

ある建築関連の担当者とお会った。「入居者の声は何処から聞き出していますか」とたずねた。「施設側の担当者から聞いています」との答え。「なぜ入居

者に直接聞かないのですか」と聞いたが、答えに詰まったようだった。

「施設や住宅にはもっと心が欲しいんですが」と言ってみた。終末期を過ごす場所として考えたとき、ほとんどの人たちはその場から動けなくなる。その場からの目線が自分の見える世界になってしまう。だからその場で「四季」を感じられることが大切なのではないだろうか。

部屋の中で四季を感じるためには、ハード面ではなくソフト面をいかに充実させるかが大切。そんな話をした見たが、担当者は驚いた顔をしていた。考えてもいなかったようだ。入居者の声を聞けば、その声を施設側に伝えることができるし、施設側には最高のプレ

ゼンテーションになるのではないか。また薬局の担当者とも話しこんだ。薬局が施設や在宅に出向き、投薬指導しているところはまだ少ない。沢山の薬を飲んでいて忘れがちになる薬。沢山の薬を飲んででてる副作用。私も1日に10錠を超える薬のお世話になっているが、朝・昼・夕・晩、ついつい飲み忘れてしまう日もある。だから私は行きつけの薬局で薬の飲み合わせなどをチェックしてもらっている。飲む薬は常に変化するからだ。様々な職種連携が叫ばれている。しかし患者目線に立てば、在宅医療でもまだ目の届かないことは多い。非常事態が起きる前に何かの対策をとるべきだろう。